

# 博士課程教育リーディングプログラム 平成27年度プログラム実施状況報告書

採択年度	平成23年度		
申請大学名	東京大学	申請大学長名	五神 真
申請類型	複合領域型（生命健康）	プログラム責任者名	宮園 浩平
整理番号	C02	プログラムコーディネーター名	岩坪 威
プログラム名	ライフイノベーションを先導するリーダー養成プログラム		

## <プログラム進捗状況概要>

### 1. プログラムの目的・大学の改革構想

#### 【目的】

- 少子高齢化が世界的に進行する中で、基礎生命科学と多様な周辺領域の上に立つ予防・診断・治療などの先端医療開発システムの構築はライフイノベーションの究極のゴールの一つであり、人類社会の重要な課題である。先端医療開発システムは複雑系であり、その先進性を担保するのは生命科学および多様な周辺領域における世界最高水準の研究である。従って、リーダーには多分野の知識と人をまとめ上げるための複合的能力「リーダー力」（自らの専門の確固たる軸足、俯瞰的視野、コミュニケーション能力、見識）が要求されるが、このような能力を養成することのできる学位プログラムは存在しない。
- 本プログラムでは、基礎生命科学と多様な周辺領域の上に立つグローバルな先端医療開発システムを構築するために必須の科学・技術を扱っている医・工・薬・理学系の専攻が緊密に協働して、部局横断型の学位プログラムを立ち上げ、上記の要求特性を満たす国際的リーダー候補人材を育成する。大学院で育成する人材と、実社会で求められる人材との間にミスマッチがあるという不満も産業界や官界から多く聞かれる。このようなミスマッチを解消し、産官からも期待される人材を生み出すことで、キャリアパスの拡大・開拓も含めた部局横断型の大学院教育改革を実践する。

#### 【大学の改革構想】

- 東京大学行動シナリオの大方針である行動ビジョンにおいて、「真の教養を備えたタフな東大生」という項目が挙げられている。その内容を要約すると、「国際的な広い視野、強靱な開拓者精神を持ち、公共的な責任について自ら考え行動するタフな人間を、現実のさまざまな事象に向き合い、粘り強く応答し、あるべき解を求める中で、養成する。」「大学院生が存分に能力を高めることのできる環境を整え、高度専門職業人として、将来像が描けるような環境を作る。」「大学院生への研究支援を拡大し、国際的な活躍と交流の場を拡大する。」「豊

かな知識を基盤に、能動的学習や国際経験・社会体験を通じて、多様な価値観の存在を意識したコミュニケーション力や、知や社会のフロントを切り拓く行動力を備えたタフな学生を育てる。」とあり、医・工・薬・理学系の専攻が協働して、部局横断型の学位プログラムを立ち上げ、社会的に重要なライフイノベーションを先導する国際的リーダー候補人材育成を目的とする本プログラムの内容は、行動ビジョンに良く合致している。また、2015年10月に発表された「東京大学ビジョン2020」の基本理念である「卓越性と多様性の相互連環」はまさに本プログラムのめざしているところであり、異分野融合による「知の協創の世界拠点」の形成は、プログラム終了後をも見据えた目標である。特に、基本理念の骨子である4つのビジョンのうち、教育に関わるビジョン「基礎力の涵養と「知のプロフェッショナル」の育成」のアクション②国際感覚を鍛える教育の充実、⑤学生の多様性拡大、⑥教養教育のさらなる充実、⑦東京大学独自の教育システムの世界発信、社会連携に関わるビジョン「21世紀の地球社会における公共性の構築」のアクション①学術成果の社会への還元、③学術成果を活用した起業の促進、そして運営に関わるビジョン「複合的な「場」の充実と活性化」のアクション③構成員の多様化による組織の活性化、⑤世界最高の教育研究を支える環境の整備に貢献するプログラム作りを実践している。

## 2. プログラムの進捗状況

- 分野俯瞰講義を15回、外部講師を中心としたリーダー論講義・演習を13回、外国人を含む3名の教員による英語の輪講を10回実施した。
- リーダー論演習として、外国人講師の指導の元、HBSのケーススタディを元にグループワークによるビジネスケースを行い、英語で発表を行った。
- 各研究科に設けた共通実験室（総面積382m<sup>2</sup>）に、多機能かつ高額のため単独の研究室や研究科では購入が難しい先端共通機器を追加整備し、医工薬理の異なる研究科の学生46名が、自らの専門と異なる研究室において31コースの学内実習に参加した。先端機器の有効活用と、共通実験室における異分野交流を促進するため、先端機器の説明会を4回行った。
- 延べ37名が4企業1省庁における国内の学外実習に参加した。
- 産官学の多様な講師による実践的指導を演習形式で受けるスチューデントセミナーを7回開催し、延べ30名のコース生が参加した。内1回は修了生によるサイエンス・コミュニケーションワークショップとした。
- 新たな試みとして、3名のコース生が国内の国際会議に参加し、メインスピーカーを招待して特別講演とコース生の英語による会議報告に対するフィードバックを得る、アウトリーチを1回行った。
- 15名が11箇所の海外研究機関にて2ヶ月の海外短期留学、延べ60名が数週間以下の海外短期研修を行った。海外短期研修のうち3回は、「議論力強化ワークショップ」として特任教員が企画・引率し、それぞれ11名、7名、7名のコース生が約2週間にわたって、2企業2研究機関10大学を訪問し、現地の学生や研究者と、口頭やポスターによる研究発表及びディスカッションを行った。
- プログラム教員及び特任教員延べ14名が、新規のインターンシップ先の開拓と、留学生の勧誘を主な目的として、海外6カ国の学会・研究会、企業や大学等の先端研究室を訪問した。
- コース生の企画による、異分野のコース生または教員との共同研究を公募し、選抜された10名が共通実験室等を使って研究を行った。
- 学術振興会が主催するHOPEミーティングにコース生が1名参加し、著名な研究者や優秀な学生と交流し、グッドクエスチョンアワードを受賞した。
- パンフレットやウェブサイトの拡充等により、プログラムに関する学生への浸透を図り、優秀な人材候補47名を採用した。ウェブサイトの英語翻訳を進め、外国人留学生への対応と、次年度の留学生の新規応募者数の増加を図った。
- プログラムの趣旨や内容について、コース生、コース生の指導教員、プログラム教員等関係者の理解を深めるために、ポスター、アンケート、ニュースレター発行を行った。

- コース在籍1年目には月額8万円、2年目以降は月額18万円の奨励金を支給し、授業料免除の制度と併せ、優秀な学生への経済的支援を行った。TAを9名採用し、講義・輪講・全体会議等のプログラム支援に供した。全体会議及びコロキウムにおいて、16名のコース生が運営委員として企画・運営にあたった。
- 教育タスクを補佐する特任教員7名、4研究科にまたがり教務、経理、広報を行う事務支援職員11名と、URA 1名が連携してプログラム運営のサポートを図り、優秀な学生への系統的な支援を行った。意思決定機関であるプログラム運営委員会での決定事項を特任・事務実務連絡会にて実行し、現場の課題を運営委員会に戻す体制を推進した。
- 平成27年6月20日に全体会議を、平成28年3月5-6日にコロキウム（リトリート）を開催し、プログラム担当者とコース生の間でプログラムの内容について共有するとともに、コース生が企画・運営を行うことで、リーダーシップの醸成を図った。また外部講師を招き、グラント申請の書き方の講習やシナリオプランニングに関するグループワークを行った。
- 外国機関より1名、民間より1名、大学より1名、財団法人より1名、研究機関より1名に外部評価委員として就任頂き、全体会議に参加頂いた。
- リーダーシップに関するプログラムの効果を測るために、プログラム開始時と修了時にアンケートを実施した。
- コース生の候補者資格審査を、44名のコース生に対して実施し、全員が審査を通過した。
- 候補者資格審査に合格したコース二年次のコース生44名に対し、異分野のプログラム教員をそれぞれ1名ずつGPLLI生学位指導教員（副指導教員）として配属し、博士課程における研究計画を審査し、メンターとして助言を与えるとともに、博士課程を通じて個別に指導に当たる体制を本格稼働させた。
- 昨年度確立した修了生の審査基準と手順に基づき、47名の修了候補者について審査を行い、学位審査延期者11名と単位取得退学者2名を除く34名を平成27年度の修了生として認定した。
- 学振DCに新たに29名が合格した。
- ウェブサイトにカリキュラムのシラバスや発表資料、レポート、新規コース生向けのプログラムの概要説明資料等をアップロードし、学生への周知、採点やカリキュラムの管理に供した。また外国人コース生及び新規に応募する留学生への情報提供のために英語化を進めた。
- H27年度のリーディングフォーラム2015の幹事校として実行委員会に3名の教職員が参加し、企画・運営に携わった。学生フォーラムに学生7名（内傍聴者2名）、修了生1名、教員1名、統括ファシリテータとして教員1名が参加し、プログラムワークショップの講演者1名、司会者1名、スタッフセミナーのモデレータ1名、学外協力者として企業より2名、受付等運営スタッフとして9名の教職員が参加した。